

中高大連携教育プログラムの研究 ——青森県内デザインワークショップを事例として——

高屋 喜久子[†]・石毛 清八^{††}・岩見 一郎^{†††}・佐藤 昭雄^{††††}

An Educational Program of the Secondary School-University Collaboration —A Case Study of Design Workshops in Aomori Prefecture—

Kikuko TAKAYA[†], Seihachi ISHIGE^{††}, Ichiro IWAMI^{†††} and Akio SATO^{††††}

ABSTRACT

In this paper, some practices of an educational program of the secondary school-university collaboration (SUC hereafter) will be reported. The program is based on the design education of the Faculty of *Kansei Design* of Hachinohe Institute of Technology. At first notable examples in precedent relevant studies will be listed focusing on the SUC. Next a design program based on the SUC will be reported, including its process and contents, and the results of the practice. Furthermore, the development of an educational program including the regional alliances with the board of education of a neighboring community will be presented. Finally, an education program based on the high school-university articulation will be discussed as one example of the future developed SUC program. The further improvement of this program will be promoted, based on the result of these attempts, with the expansion of involved areas and the target secondary schools including junior high schools. It is hoped that the education resources of this university will be more actively shared by local secondary schools and an educational program of the secondary school-university connection will be created and carried out for its self-revitalization.

Key Words: *secondary school-university collaboration, design workshop, program, art education, the board of education of Rokunohe Town*

キーワード: 中高大連携, デザインワークショップ, プログラム, 美術教育, 六戸町教育委員会

1. はじめに

令和 3 年 12 月 6 日 受付

† 感性デザイン学部 創生デザイン学科・教授

†† 感性デザイン学部 創生デザイン学科・准教授

††† 感性デザイン学部 創生デザイン学科・教授

†††† 感性デザイン学部 創生デザイン学科・教授

グローバル化、情報化、少子高齢化に加えて、with コロナの要因が加わり社会構造は大きな節目を迎えている。平成 11 年文部科学省中央教育審議会、「初等中等教育と高等教育との接続の改善について答申」によれば、第 1 章検討の視点として (1) 「自ら学び、自ら考える力」と「課

題探求能力」の育成を軸にした教育 (2) 後期中等教育段階における多様性と高等教育段階における多様性との「接続」との記載がある。続く第4章初等中等教育と高等教育との接続の改善のための連携の在り方では、次のように記載されている。(1) 入学者選抜だけではなく、カリキュラムや教育方法などを含め、全体の接続を考えていくべきであり、高等学校と大学の両者がいかにして、それぞれの責任を果たしていくかという観点から、両者の教育上の連携を拡大することが必要。

本稿では高等学校と大学の連携に、さらに中学校を加えて、デザインワークショップ型の中高大連携教育プログラムについて実践を重ねて研究を深めた。

まず先行研究の調査では、「中高大連携」をキーワードとして検索した結果を記載する。次にデザインプログラムの実践例について説明しながら、これまでの経緯をたどる。昨年からの新型コロナウイルスの影響により、行事が延期や中止せざるを得ない状況ではあったが、六戸町教育委員会主催の中学生大学見学会が本年8月に開催され、筆者らが授業を担当した。そこで、六戸町教育委員会の教育長を訪問し中高大連携教育についての意見交換を行い、今後の応用展開について探求する機会を得た。

今後は、中学校・高等学校の生徒向けプログラムや、大学生が主体的に参加する地域の美術・デザイン教育の発展を見据えた、中高大連携プログラムのあり方と実践方法を探っていく。

2. 中高大連携教育プログラムの先行研究

先行研究調査では、「中高大連携」をキーワードとしてウェブ検索を行った結果、教育機関での論文や入試改革に関する論文が数十編見つかった。その中で参考になりそうな学術書は、残念ながら今回は見つけることができなかった。

本研究に関連づけられる主な論文を、下記に挙げ内容に触れる。『カリキュラム研究からみ

た「高大接続・連携」の諸課題—「教科課程」、「断絶」、「大学0年生」—』2016年、根津朋実によれば、「高等学校と大学との接続」や「連携」を、「高大接続」や「高大連携」と略す傾向は、1990年代後半から目立つようになったとしている。

2018『デザイン思考を活用した探究型学習に関わる教育連携活動の広がり』柚木 泰彦 三橋 幸次 早野 由美恵 渡部 桂 岡崎 エミ 吉田 卓哉らは、2015年に「探求型学習・デザイン思考に関わる研究会」を立ち上げ、中高教員による研究会と生徒対象ワークショップの実施を通して、デザイン思考教育に関心を持つ教員のネットワークづくりを進めると共に、確かな学力の定着と向上、地域課題への取り組みを通じた就業観育成支援等、各校での教育場面に沿った実践の可能性を探ってきたと著している。

2019『小・中・高大連携による授業改善の工夫と課題—「主体的・対話的で深い学び」を実現するために—』虫賀文人は高大接続改革の目的は、高等学校教育、大学教育、そして大学入学者選抜を三位一体で改革することにより、高校生、大学生に必要な資質・能力を身につけさせることである。しかしながら、大学入学者選抜改革ばかりに注目が集まっているのが現状である。大切なことは、「高等学校、大学が、互いに連携しながら、若者にどのような力を身につけさせたいか」ということである。と述べている。

八戸工業大学や地域産業総合研究所の紀要においても、高大連携をテーマとした関係論文が複数みられる。鶴田ら 2021『SDGs 達成に向けたマイクロプラスチックに関する研究—高等学校の科学愛好会の指導を通じて—』や、佐々木ら 2017『互恵関係に基づいたものづくりに関する高大連携事業』、黒滝・日影ら 2017『機械系学生資格取得支援に関わる高大連携』、田村・桃井ら 2013『地方における「キャリア教育型」高大連携の実践的研究』などが挙げられ、高大連携研究やその実践が、さまざまな形で進められてきた。

3. デザインプログラムの実践

今回実践したデザインワークショップ型の教育プログラムは、身近で目にするジュースなどの1リットル紙パックを題材として、視覚伝達（ビジュアルデザイン）の重要性を学び、パッケージデザインを体感することを目的とした、体験授業である。受講生には、前半でパワーポイントを用いた説明を聴いてビジュアルデザインへの関心の扉をあけてもらう、後半で実際に紙パックのデザインを体験してもらう。最後のまとめでは他者の作品を鑑賞しながら情報共有をすることで、自分の作品を客観視する。総合的に、ビジュアルデザインの重要性への気づきを持ってもらうことが、狙いである。

授業始めの挨拶では、担当教員と特別指導補助学生（本学ではSAと呼ぶため、以降SAと記載する）らによるスタッフ紹介を行い、初対面の生徒らの緊張感を和らげるようにする。SAの役割は特に重要で、授業に参加している生徒達にとって年齢の近いお兄さんやお姉さんが、大学生としてこんなふうには活躍しているのだという実像に触れて、実感を持ってもらうことに繋がる。

「ビジュアルデザインは楽しいー美味しいパッケージデザインー」と題して、大学見学会や体験授業、キャリアセミナーとして、主に50分間で実践された授業の時間配分と主な進行内容を、表1に示す。

表1 デザインプログラムの進行と内容（50分授業の場合）

順序	内容	(目安時間)
1:	挨拶、スタッフ紹介、学科紹介など	(5分)
2:	パッケージデザインの講義PP	(10分)
3:	デザインワークショップ	(25分)
3-1	制作するジュースの選択	
3-2	キーワード作成	
3-3	アイディアスケッチ	
3-4	完成イメージ制作	
3-5	チーム内発表	
4:	全体での作品鑑賞、まとめ、挨拶	(10分)

3.1 パッケージデザインの説明

パワーポイントによる説明は10分ほどで、その始まりはデザインの語源からである。次いでデザインには多くの分野があり、ビジュアルデザイン、プロダクトデザイン、空間のデザイン、地域のデザインについてそれぞれの具体例を写真で示す。（図1左）今回とりあげるビジュアルデザインは、「情報の見える化」であること、その要素として、形・色・言葉の3つの要素が重要な役割を果たし、後半のワークショップではその3要素からパッケージを考えていくことを説明する。（図1右）



図1 デザインの分野、ビジュアルデザイン



図2 トイレのマーク、ジュースのパッケージ

まず形については、クロネコヤマト宅急便のシンボルマークや、スマートフォンの画面アイコン、東京オリンピックのシンボルマーク等を例に、一目で理解できる形の重要性について説明する。次の色については、ジュースで美味しそうなオレンジがグレーの色になり、綺麗な赤のラディッシュが青紫色になると、美味しそうではなくなることを写真によって示す。一般的にトイレのマークは、女性のシルエットを赤で、男性のシルエットを青で示すことが多いが、これが女性のシルエットを青で、男性のシルエットを赤で示すと混乱を招いてしまうであろうことを想像して、色の重要性についての学びを得る機会とする。（図2左）

言葉については、食品パッケージを例に、美しい写真でインパクトを与えるジュースのパッケージや、言葉で「まっかなあまおういちごジャム」「つぶつぶブルーベリージャム」と記載された瓶のパッケージ、数字が大きく記載されたカラフルなゲーム感覚のチョコレートパッケージの写真などを説明する。缶のりんごジュースで、「山形りんご」を「山形代表」として人格権を持たせたネーミングに変更、リンゴの写真はイラストへ、背景をクリーム色から黒色へと変更した結果、売り上げが倍増した例等も説明し、ネーミングの重要性も合わせて伝える。赤城乳業「ガリガリ君」の例などは、生徒達にとってなじみが深く、擬音を使うことやネーミングに人格権を持たせること、「ん」で終わるとインパクトが強いことなども説明する。

次に、オレンジジュースや野菜ジュースの美しくカラフルで、みずみずしくシズル感溢れるデザインが、さまざまあることを数枚の写真で示す。さらに、美味しそうなオレンジの写真パッケージと比較して黒いドクロマークのついたパッケージがあったなら、どうなるのかを生徒達に連想しながら考えてもらう。(図2右)

中身がどんなに素晴らしくても、危険な印象のパッケージでは意味がない。安全性・安心感を示すこと、清潔感があることは、食品パッケージにおいて最も重要な要素であることを学んでもらう。最後に、次のワークショップで行う4つのステップを図で解説して、パワーポイントによる説明を終了する。

3.2 デザインワークショップの内容

ワークショップ体験の主な流れを記載する。

- ①どんなジュースのパッケージを創るのか選んで記載する。
- ②パッケージデザインの発想で、ひらめきとなる言葉やコンセプトにつながるキーワードを書く。
- ③サムネイルスケッチとして、イメージをラフに描く。
- ④サムネイルスケッチから、良いと考えたアイデアを1分の1原寸サイズで、色鉛筆で着色しながら描く。
- ⑤チーム

内で発表した後、教室内で他の生徒の作品を鑑賞する情報共有の時間を持つ。⑥クロージングとして、引率や担任の先生からも感想やコメントを述べてもらう。SA（授業補助学生）からも、意見や感想、後輩へのアドバイスをもらう。以上50分（場合によっては45分）の中では、タイトな時間配分であるが、参加者からは、次のような感想が寄せられている。

楽しかった、ジュースのパッケージを考えるきっかけとなった、他の生徒の作品が見られて良かった、今後コンビニやスーパーに行きジュースのパッケージを見る目が変わる、などである。総じて楽しかったという感想が多く、ジュースのパッケージを参考に数本並べて、実際に飲んでもらうのは好評であった。特に8月9月などの暑い時期には、会場に着いたらすぐに好きなジュースを紙コップへ入れてもらい、授業の始まりに「こんにちは、本日はようこそ！」と乾杯すると、中学校・高等学校の生徒たちはとても喜んでいる様子であった。使用する道具として色鉛筆などは大学側でも準備したが、参加人数の多い時には事前連絡で各自が普段使用している色鉛筆を持参してもらった。

授業の終了時に、手がけた作品を丸めて持ち帰り、時間が足りなかった部分は自宅で仕上げるよう伝えた。カラフルな色の輪ゴムを準備しておいたところ、生徒によっては何色かの輪ゴムを嬉しそうに持ち帰る姿が印象的であった。微細なことではあるが、輪ゴムの色を8色（緑・黄色・青・ピンク・紫・白・黒・グレー）の中から選ぶ行為一つでも、色に関する認識の高まりが期待できる。大学で用意する色鉛筆は、24色型平箱入り、金銀入り24色箱入り、コンパクトな筒型パッケージの24色タイプなど3種類を用意して、参加者たちが道具選びの段階から少しでもモチベーションが上がるよう工夫をした。受け身ではなく、自ら体験するアクティブラーニング型の授業を目指したとも言える。

表2 デザインプログラムの実践 (2018年～2021年)

No.	開催日時	時間	授業時間	講座のテーマ	開催目的と場所	学校名・学年	受講者数
1	2018年6月15日(金)	13:25～14:15	50分	デザインの役割について学び、 パッケージデザインに挑戦しよう	キャリアセミナー 青森明の星高等学校	青森明の星高等学校1年生・2年生	42
2		14:25～15:15	50分			青森明の星付属中学校1年生・2年生	43
3	2018年8月7日(火)	11:10～12:00	50分	「ビジュアルデザインは楽しい」 —美味しいパッケージデザイン—	六戸町中学生大学見学会 八戸工業大学 K301	六戸中学校2年生	15
4		14:30～15:20	50分			七百中学校2年生	10
5	2018年9月12日(水)	12:00～12:50	50分	「ビジュアルデザインは楽しい」 —美味しいパッケージデザイン—	大湊高等学校大学見学会 八戸工業大学 K301	大湊高等学校1年生	17
6		14:00～14:50	50分				43
7	2018年10月17日(水)	12:50～14:20	90分	「ビジュアルデザインは楽しい」 美味しいパッケージデザイン	第一高等学校体験実習 八戸工業大学 K301	八戸工業大学第一高等学校2年生	38
8	2018年10月19日(水)	11:40～13:10	90分	デザインの気づき デザインの体感 美味しいジュースのパッケージ制作	放送大学 面接授業 八戸サテライトキャンパス	放送大学 面接授業専門科目 「社会と産業」21歳～73歳	14
9	2018年10月31日(水)	14:30～15:15	45分	「ビジュアルデザインは楽しい！」 美味しいパッケージデザイン	第二高等学校体験講義 八戸工業大学 大会議室	八戸工業大学第二高等学校1年生	90
10	2019年6月25日(火)	14:20～16:00	90分	ビジュアルデザイン論 効果的なパッケージデザインの手法	百石高等学校体験授業 八戸工業大学 KDプラザ	八戸工業大学1年生	20
11	2019年8月8日(木)	11:10～12:00	50分	「ビジュアルデザインは楽しい」 —美味しいパッケージデザイン—	六戸町中学生大学見学会 八戸工業大学 K301	六戸中学校2年生	16
12		14:20～15:10	50分			七百中学校2年生	15
13	2019年9月5日(木)	12:50～14:50	120分	「ビジュアルデザインは楽しい！」 美味しいパッケージデザイン	百石高等学校体験授業 八戸工業大学 K301	百石高等学校2年生	13
14	2019年10月17日(木)	12:50～14:20	90分	「ビジュアルデザインは楽しい！」 美味しいパッケージデザイン	第一高等学校体験実習 八戸工業大学 K301	八戸工業大学第一高等学校2年生	3
15	2021年4月19日(月)	12:50～14:20	90分	ビジュアルデザイン演習Ⅲ 青森県の美味しいパッケージデザイン	八戸工業大学授業 八戸工業大学 KDプラザ	八戸工業大学感性デザイン学部3年生	24
16	2021年8月5日(木)	11:10～12:00	50分	「ビジュアルデザインは楽しい」 —美味しいパッケージデザイン—	六戸町中学生大学見学会 八戸工業大学 K301	六戸中学校2年生	12
17		14:20～15:10	50分			七百中学校2年生	37
18	2021年11月10日(木)	12:50～13:40	50分	「ビジュアルデザインは楽しい」 —美味しいパッケージデザイン—	中学生による大学の見学会 八戸工業大学 KDプラザ	小中野中学校2年生	18
19		13:50～14:40	50分			小中野中学校2年生	18
20	2021年11月29日	14:10～15:00	50分	「ビジュアルデザインは楽しい！」 美味しいパッケージデザイン	中学生による大学の見学会 八戸工業大学 K301	島守中学校1～3年生	17
受講者人数総合計							452

3.3 プログラム誕生から現在までの実践経緯

2018年5月に、青森明の星高等学校、中学校の生徒の体験授業としてワークショップを含めたデザインプログラムを考案、実施したのを皮切りに青森県内の高等学校および中学校、大学生や社会人にも実施した。放送大学面接授業では、21歳から73歳の幅広い年齢の受講生にも実施した。2018年5月から2021年11月末まで20回のプログラム実施で、累計452名が受講したことになる。実施の日時と場所や人数を、表2にまとめて記す。

六戸町教育委員会主催の六戸町中学校大学見学会は、2018年、2019年、2021年と通算6回の体験授業を開催しており(表2黄色部分)、その記録写真を掲載する。(写真1)さらに、直近で

の開催として島守中学校大学見学会での作品や、これまでのデザインワークショップでの作品例を写真で示す。(写真2,3)

短い時間での取り組みであったものの、発想力豊かで、創造性に富んだ作品が多くみられた。ユニークなネーミングを考案する生徒もおり、ワークショップ前半部分での説明を良く理解しているようであった。

今後はプログラム内容に変化とバリエーションをつけるなど工夫改善すると同時に、大学生が高校生や中学生らに向けて開催できるよう、進化させていきたいと考える。

4. 六戸町教育委員会との情報交換

4.1 六戸町教育委員会教育長 瀧口孝之氏との意見交換 (実施日: 2021.10.18)

前掲のように全 20 回のデザインプログラムの中で六戸町教育委員会主催の六戸町中学校大学見学会では、通算 6 回の授業が行われている。中大連携教育は高大連携教育ほど多く語られることはなく、その実践例も少ない。しかし、高等教育機関の専門性の高い指導者の下で、より深みを持った研究活動や学習活動ができる環境を整えていくことは大変重要なことであり、そこには中大の連携教育の重要性が示されるものだと考える。その意味で六戸町教育委員会のこの取り組みは非常に先進性のあるものといえる。

そこで六戸町教育委員会教育長 瀧口孝之氏を表敬訪問し、六戸町中学生大学見学会が始められた経緯やそのねらいについて、また、今後可能な支援、協力のあり方についてお話を伺った。

この事業は平成 27 年 (2015) 8 月、前教育長 櫻田泰弘氏の在任時に始められたもので、六戸町立六戸中学校・七百中学校の 2 年生を対象に、キャリア教育への理解を深めるために進路指導の一環として実施された。そこには生徒一人一人が抱いている夢の実現に向け、今後の学校生活がより充実したものとなるようにとの願いが込められている。大学見学会は例年夏季休業中の 8 月初旬に行われており、今年で 6 回目となる。(令和 2 年度はコロナ禍のため中止)

平成 27 年の第 1 回大学見学会は、六戸中学校(小山田晋弘校長)と七百中学校(藤川雅之校長)の 2 年生、計 64 人が参加。生徒たちは数人のグループに分かれ、弘前大学文京キャンパス敷地内の研究室や附属図書館、資料館などの様子を見て歩いた後、講義室で弘前大学の担当者から、各学部の特色や留学事業、サークル活動などの説明を受けるという内容だった。

平成 28 年の第 2 回大学見学会は、六戸中学校と七百中学校 2 年生計 88 人が参加。この年は先に担当者からの説明を受けた後、グループに分かれての学内施設見学となっている。平成 28 年



写真 1 六戸町中学大学見学会体験授業 2019 年 8 月 8 日

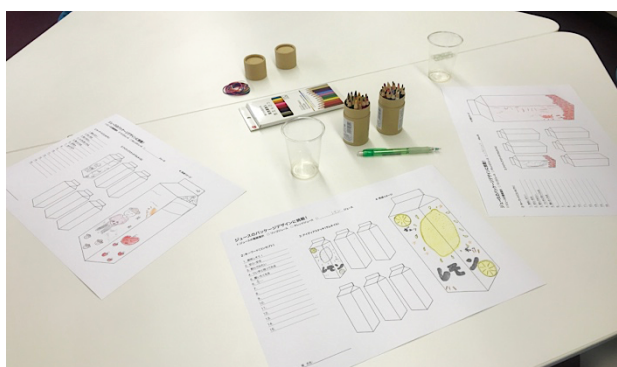


写真 2 島守中学大学見学会の作品 2021 年 11 月 29 日

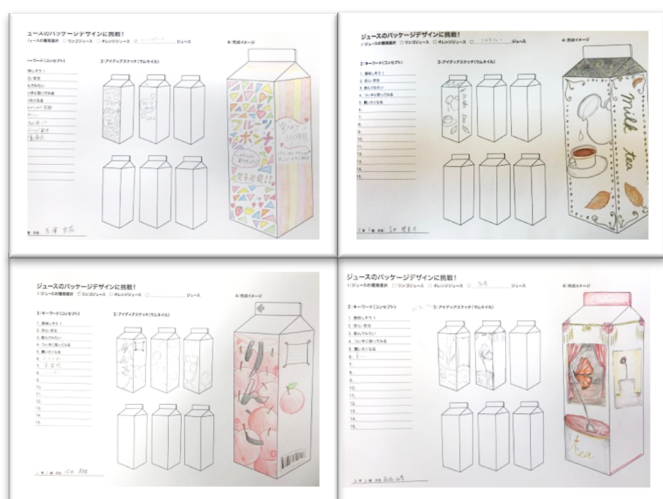


写真 3 デザインワークショップの作品例

度「広報ろくのへ」9月号には大学見学会の記事が掲載されており、その中に弘前大学附属図書館を訪れた七百中学校の生徒の感想が紹介されている。「古い時代のものや分厚い本などがたくさんあってびっくりした。こういうところで勉強してみたい。」

普段目にすることがない国立大学を訪れ、その広大なキャンパスや充実した施設、そこで学ぶ大学生の姿を自分の目で見てくることは中学生にとって新鮮な体験であり、大学進学への夢を膨らませる貴重な時間となったであろう。

平成29年の第3回大学見学会も同様に弘前大学で行われた。同年7月に着任した現教育長 瀧口孝之氏は大学見学会の意義を十分理解したうえでこの事業を継承しつつ、中学生にとってより充実した活動になるよう内容を検討し、翌年の平成30年から見学先を現在の八戸工業大学と八戸学院大学に変更した。瀧口教育長はこの時のことを次のように語っていた。

「中学生にとって県内唯一の国立大学を見学することの意義はとても大きい。しかし、往復5時間ほどの遠距離にあり、大学での活動時間が制限されることやオープンキャンパスのように自由に行動できるが、入れる施設が少なく、参加生徒に対しての個別の対応も特になかったため、結果、大学の雰囲気だけを味わう形となってしまるのが残念だと感じた。」

そこで、移動時間が比較的短いこと、地域的には六戸町と同じ南部地方の大学であり、卒業生も多く在学し、より身近な存在であることなどを理由に見学先を八戸工業大学と八戸学院大学に変更した。行き先を二つの大学にしたことで、工学、デザイン、経営、看護、幼児保育など多様な学部・学科を選択できることになり、幅広い視野で進路を考えることができるようになった。なによりも移動距離が短く活動時間が十分に取れるようになったので、プログラムの中に体験授業を組み込むことが可能になり、中学生が十分満足できる内容になった。

ちなみに今年度の大学見学会での体験授業は次の内容で実施されている。

八戸工業大学の体験授業

- ・工学部電気電子工学科「理科っておもしろい？役に立つ？～例えば電気工学について～」
- ・感性デザイン学部創生デザイン学科「ビジュアルデザインは楽しい—美味しいパッケージデザイン—」

八戸学院大学の体験授業

- ・健康医療学部看護学科「健康に生きるために」
- ・短期大学部幼児保育学科「身につけたい食習慣」

瀧口教育長は将来、六戸町と大学とで包括連携協定を結び、中学生と大学生が直接交流できるような活動を取り入れるなどさらに関係を発展させ活動内容を充実させたいと語っていた。

包括連携協定を結ぶとは、継続的・安定的な関係を構築し、地域の課題についてお互いが協議し、物事を進めていくことである。そのメリットは政策決定を行う段階から自治体と一緒に課題の解決方法について、適切な議論検討ができることである。また、自治体との議論・検討を経ることで案件に隠された自治体のニーズを的確に捉えることができる面もある。協定締結には六戸町、本学、八戸学院大学との協議、調整が必要となり、容易なことではないと想像できるが検討する価値は十分にあるだろう。

4.2 六戸町立七百中学校教諭 阿部朋子氏との情報交換（実施日：2021.10.29）

六戸町教育委員会教育課指導主事 横山祥人氏より、2021年8月5日に開催の大学見学会の指導に直接関わった七百中学校2学年主任の阿部朋子教諭を紹介していただき、大学見学会に係る事前・事後指導について話を伺った。

(1) 事前指導

今年度より生徒1人1台のタブレットが導入され教科等で活用している。大学見学会に先立ち、総合的な学習の時間にこのタブレットを使い訪

問先の大学について調べた。教師が準備したワークシートを使用して大学の特色、学部の内容、部活動・サークル活動、卒業後の就職先などについてまとめた。八戸工業大学、八戸学院大学には卒業生や兄姉などが在学している生徒もあり、意外に親しみをもって見ているとのことである。7月の進路学習から大学見学会が行われた8月5日までに、夏休みが入り時間が空いてしまったのでうまく動けるか心配していたが、当日は積極的に活動してくれたので安心したと話していた。

(2) 事後指導

大学見学会終了後に六戸町教育委員会が行った事後アンケート調査結果から、感性デザイン学部に関連するものを一部抜粋して示す。(表 3)

2 学年では進路学習の成果発表の場として文化祭での展示を計画している。生徒1人1枚、模造紙サイズの紙に大学見学会で見たり、聞いたり、活動したりしたことをまとめて一同に掲示する予定である。パワーポイントでのプレゼンテーションも考えている。

取材の最後に阿部教諭は次のように話してくれた。「生徒たちは何よりも大学の敷地の広さに驚き、この活動を通して感じた大学の自由な雰囲気に憧れを抱いたようだ。見学会終了後、大学に行ってみたいと思う生徒が増えたのではないだろうか。」

事前学習で大学のホームページを調べ、なんとなくいいなと感じていたことが、実際に広いキャンパスを見て、大学の雰囲気を肌で感じ、体験授業を受けることによって大学の魅力を実感できたようだ。

今回のような体験型のプログラムをさらに改善し、直接教員や在学生に質問したり触れ合ったりする機会を増やすことができれば中学生にとってさらに満足のゆくものになるだろう。大学を体感することで具体的に大学生活がイメージできるようになり、生徒の進路達成に向けた学習のモチベーションが高まるのであればとても有意義な活動となるだろう。

表3 見学会アンケート集計結果 (感性デザイン学部の一部抜粋)

1: 見学会は楽しかったですか?
・デザインについて分かり、大学生の話聞いて楽しかったら。
・1つの科にたくさん部屋があり、作業などしやすそうだった。大学生のデザインしたのを見られて楽しかった。
・感性デザイン学部で色やデザインの話がとても面白く楽しかったからです。また自分でパッケージデザインを考えるのが楽しかったです。
・ジュースのパックを自分で絵に描いて、ほかの人も見るっていうのがとても楽しかったら。
・色や形や言葉で印象が変わることを知れたから。最後にジュースのパックをデザインして楽しかった。
・普段身近にあるものを描き、いろいろなアイデアを思いつき、それを描いてみたから。
2: 見学や体験授業とおして、大学の雰囲気を味わうことが出来ましたか?
・体験授業では自分が思うジュースのパッケージを、見た目などを考え、デザインしとても雰囲気を味わえた。
・体験授業で真剣に参加できた。とても大切な言葉を覚えたから。
・先生の説明など学校が広がったし、とても楽しいと感じたからです。
・中学校とは違う席で、とても広く大きかったからです。
・自分の好きなことを深く学べ、空き時間に課題のできる場所あった。
3: 自分の進路選択に役立ちましたか?
・選ぶかはまだ決まっていませんが、大学のことをたくさん知れました。
・八戸工業大学では、私が興味ある感性デザイン学部があったのでとても役に立った。
・将来、絵に関係する仕事に就きたいから。
・自分の進路考えが広がったから。
・感性デザインが楽しくて、入ってみたいと思ったから。
4: 全体を通して感じたことについて
・興味があることを細かく調べていくと、自分の知らないことが分かっていき身につくことが分かり、大学の良さを感じた。
・大学では広い範囲を知ることができるということが分かった。
・大学は、自分のやりたいことを研究していることが分かった。
・自由な感じがしてよかったです。
・実際に作ったものを見ると、作るのには楽しそうで面白いかなと思った。
・コンピュータがたくさんあつたのですごいなと思いました。感性デザインでは、デザインのことにについてたくさん学べたので良かったです。
・先生が楽しく教えてくれたので、楽しく勉強できそうだなと思いました。
・いちご煮のデザインを考えたり、誰も住んでいない古い家をアレンジして、おやれにしたりしているのすごいいなと思いました。

4.3 六戸町の小・中・高・大連携交流教育事業

六戸町では、幼・小・中・高・大の連携教育に係り様々な事業を展開している。八戸市のような大規模自治体では校種間の連携交流事業は各学校の裁量に任せられていることが多いが、六戸町では小規模自治体ならではの機動力を生かした魅力的な取り組みが行われ成果を上げている。年間を通して以下の事業が行われており、今後の我々の連携事業を進めていくための参考にしていきたい。(六戸町広報誌「広報ろくのへ」より抜粋)

1月：六戸町中学生海外派遣

派遣は9日間の日程で行われ、六戸町在住の、選抜された中学1・2年生12人がアメリカ合衆国メイン州キタリー町を訪れる。ホームステイなどを通じて国際理解を深め、世界的な視野だけでなく郷土への愛着を養うため、平成5年から行われてきた前事業を継続する形で実施している。生徒は、英語のスピーチや日本文化のプレゼンテーションを現地で披露するために事前研修をするなど充実した内容となっている。

2月：六戸町中学生海外派遣体験報告会

前述の海外派遣に参加した生徒たちが現地でのホームステイや交流イベントの様子を紹介しながら自分たちの感想を保護者や関係者の前で発表する。

6月：町内中学生 ふれあい体験学習

中学生が町内の子ども園に行き、ペアを組んだ園児と一緒に遊び、昼食やトイレ、お昼寝に寄り添うなど、ふれあい体験学習を行う。

7月：中学校・高等学校合同進路講演会

町教育委員会主催の事業。令和3年には、講師に女子カーリングチーム北海道銀行フォルティウス（当時）所属の近江谷杏菜氏が招かれ、「チャレンジ ～自分に挑戦、世界に挑戦～」をテーマに講演し、町内中学校と六戸高校の生徒及び関係者ら約430人が参加した。

8月：中学生大学見学会

中学2年生が進路学習の一環として八戸工業大学と八戸学院大学に行き、大学の概要説明を受け、施設見学、授業体験をする。八戸工業大学では電気電子工学と感性デザイン分野を、八戸学院大学では健康と幼児保育分野の授業を受ける。

10月：六戸町小・中学校音楽交歓発表会

町内の小・中学校の児童生徒が一堂に会し、各学校による合唱や合奏・斉唱・吹奏楽を披露。音楽によって小・中学校の交流を深めている。

5.中高大連携教育プログラムの展開

今年度は、これまで数年にわたって中高大接続連携プログラムとして本学科が実施してきたデザインプログラムの実践を、整理することができた。特に、4年前から継続的にこのデザインプログラムを実施してきた六戸町教育委員会を訪問し、情報交換できたことは大変有意義であった。次年度は、高等学校との連携による接続教育プログラムの構築を目指し、現在準備を進めているところである。

具体的には、地域の大学として地元の高等学校の教育を支援する一環として、指導者の減少に悩む高等学校美術部を、本学感性デザイン学部が支援するという教育プログラムを構想している。

但し、時間的・物理的、また人的資源等の制約のため、次年度は現在検討中の高大連携教育プログラムを構築し、実験的に八戸市内数校の高等学校美術部での実践を検討している。その上で、その取組を県内に広げるため、弘前地区と青森地区の高等学校を訪問し、高等学校美術部が抱える問題やこの教育プログラムの可能性について情報交換したいと思っている。

そして、その結果をもとに更に高大連携教育プログラムを改善し、将来的には対象地域や対象校の拡大、また中学校への拡大につなげていけたらと考えている。

6. おわりに

本学は、来年度創立50周年を迎える東北唯一の私立工業大学である。しかし、その認知度は決して高いものではなく、まして感性デザイン学部の存在と教育は十分認知されているものとは言い難い。

そこで、地域に根ざす大学として、大学の教育資源を地域の中学校・高等学校に提供し、その活性化を図るために、本学として実践できる中高大連携教育プログラムを創造し実践していきたいと考えている。

謝 辞

本デザインプログラム実施にあたり、表1に記載の参加いただいた受講生全員に、お礼を申し上げます。また機会を設けてくださった、青森県内の高等学校と中学校の開催関係者各位、および放送大学の関係者にも、改めてお礼を申し上げます。

とりわけ六戸町教育委員会教育長 瀧口孝之様、六戸町教育委員会教育課指導主事 横山祥人様、六戸町立七百中学校教諭 阿部朋子様には、深く感謝を申し上げますの次第である。

八戸工業大学入試部、社会連携学術推進室の関係各位、感性デザイン学部のSA学生、授業に協力いただいた先生方はじめ担当者にも、記して謝意を表したい。

参考文献

- 1) 初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申) 要旨
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201i.htm
(2021年11月12日アクセス)

- 2) 2000/12 答申等 新しい時代における教養教育の在り方について (審議のまとめ)

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/001237.htm
(2021年11月12日アクセス)

- 3) 根津朋実: カリキュラム研究からみた「高大接続・連携」の諸課題 - 「教科課程」、「断絶」、「大学0年生」 -, 2016.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/kyoiku/83/4/83_398/_pdf-char/ja
(2021年11月12日アクセス)

- 4) 柚木 泰彦 三橋 幸次 早野 由美恵 渡部 桂 岡崎 エミ 吉田 卓哉: デザイン思考を活用した探究型学習に関わる教育連携活動の広がり, 2018.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/jssd/65/0/65_222/_pdf-char/ja
(2021年11月12日アクセス)

- 5) 虫賀文人: 小中高大連携による授業改善の工夫と課題 - 「主体的・対話的で深い学び」を実現するために, 2019.

https://asahi-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=10899&item_no=1&page_id=24&block_id=37
(2021年11月12日アクセス)

- 6) 青森県上北郡六戸町「広報ろくのへ」

https://www.town.rokunohe.aomori.jp/chousei_kouhou.html
(2021年11月15日アクセス)

要 旨

本稿では、本学感性デザイン学部のデザイン教育を基盤とした中高大連携教育プログラムの実践について報告する。最初に中高大連携に係る先行研究の中で特に参考とした事例を列挙する。次に本学における中高大連携に基づくデザインプログラムについて、実践の経緯、内容、成果を含めて説明する。さらに近隣の自治体との地域連携を加えた教育プログラムの開発について言及する。最後に今後の中高大連携教育プログラムの展開として、高等学校との連携による接続教育プログラム構築の可能性についてふれる。本プログラムでは、これらの取り組みの成果を基に改善・充実に努め、対象地域及び中学校を含む対象校の拡大に繋げていきたいと考えている。今後は、地域に根ざす大学として本学の教育資源を地域の中学校・高等学校に提供し、その活性化を図るために、本学として実践できる中高大連携教育プログラムを創造し実践していきたい。

キーワード: 中高大連携, デザインワークショップ, プログラム, 美術教育, 六戸町教育委員会